

【無料配布】短編ミステリ

文学フリマ札幌10のための書き下ろし

名探偵・羽下暮善蔵 最後の事件

作・庵字

「羽下暮、これはどういうことなんだ？」

「どういう意味だ、野田」

「決まっているだろ。この『密室殺人事件』の解決——トリックだよ」

「何か、問題があったか？ 合理的な解決を見た私は思っているが」

「問題があるに決まっているだろ！ 何だよ、これは……部屋には隠し通路があって、犯人はそこから出入りして犯行に及んだのです……だと？」

「そう。それが真相だ」

「……羽下暮、これでいいと思っているのか？」

「いいも何も……。もう一度言う、それが真相だ」

「……羽下暮、座れよ、落ち着いて話そう。コーヒーでも持ってこようか」

「知らない。話というのを早く聞きたい」

「いいか、羽下暮……僕はこれまで、君の『相棒』として、ずっと一緒に働いてきた。そんな僕だからこそ……『立場』を超えて、言わせてもらわないといけない。『これ』は、三十年以上も続いた、日本が誇る本格ミステリ『名探偵・羽下暮善蔵シリーズ』の掉尾^{ちようび}を飾る事件なんだ。その、羽下暮善蔵最後の事件の真相が……『隠し通路』でいいのか？」

「不服か？」

「——当たり前だろう」

「君のほうこそ落ち着け、野田。さっきも言ったが、これは合理的な、極めて理論的な推理によって導き出された解決なんだよ。入手した手がかりを積み上げていくと、そういう結論が浮かび上がってくるんだ。推理に穴はひとつもない。手がかりの出され方だって極めてフェア、かつ読者の盲点を突いた絶妙なものだった。しかも、この真相には、他にも手段があったにもかかわらず『隠し通路』を使わなければならなかった理由」というホワイダニツト的な納得もある」

「そういうことじゃない。過程は問題じゃない。大事なのは『結果』なんだよ。いいか、このままじゃ『隠し通路』を使った密室殺人。これが、羽下暮善蔵最後の事件として語り継がれていくことになるぞ。世間の嘲笑の的になることは必至だ。頑張っ

「野田、そもそも、このシリーズは『結果の意外性』よりも『推理の意外性』に重きを置く形式のミステリだったはずだ。『一発ネタのびっくり箱』で過度に持ち上げられたことは一度もなかったが、そのかわり、ブレずに、地味かもしれないが良質なミステリを提供し続けてきたからこそ、安定した人気を博してこれたんじゃないか」

「羽下暮、君はやはり古いよ。三十年前からずっと変わっていない」

「『変わっていない』か。そうかもしれないな。なにせ、『羽下暮善蔵シリーズ』は、レギュラーが歳を取らない設定だからな」

「話を逸らすな。なあ、羽下暮、もうそんな時代じゃないんだよ。正直、このシリーズのコンセプトは古い。今の読者に訴求できるようなものじゃない」

「私が変わらないとするなら……君は変わったな、野田」

「三十年だぞ。変わらない君のほうがおかしいのさ。とにかく、これはない。隠し通路の密室殺人なんていう、これは。羽下暮善蔵最後の事件、という看板を背負っているなら、なおさらだ」

「野田、何度も言うが肝はそこじゃない。これはアンチテーゼでもあるんだ。今どきの密室殺人となると、もう端から隠し通路の存在は否定されている。隠し通路の『か』の字も書いてはいけないというくらいに忌避されている。作中の捜査や推理によって否定されるならまだしも、もう、まるでタブーでもあるかのように、作中でその可能性に触れられもしないことも少なくない。理由は明白だ。『つまらない』からだ。エンターテインメントとして失格の烙印を捺されてしま

うからだ。『密室殺人事件の真相が隠し通路を使ったトリックでした』なんてミステリを書いたら、間違いなく作者は袋叩きに遭うだろう。しかし——この事件が、仮に『現実起きた事件』だったら、どうだ？ 『結論としてつまらないから隠し通路なんてありえない』などと考えるわけがない。『その可能性を論じるに値しない』なんていう戯れ言が通用するわけがない」

「論点がズレている。『これ』は現実の事件じゃない」

「作品の中の世界にとっては『現実』『だ』」

「詭弁だ」

「野田、超人的な探偵や殺人トリックを弄する犯人なんていう非現実的な存在が跋扈しているミステリの世界において、本当なのは『推理』だけなんだ。荒唐無稽な設定やトリックは実在しないが、トリックを考える作者、それを解こうとする読者の思考だけは確実に存在する。リアルな推理、思考の末、びっくり箱的な大トリックなど用いない、現実にも存在しても何らおかしくない『隠し通路』に行き着くというのは、このシリーズの掉尾を飾るにむしろふさわしいと私は思う」

「そうは言うがな、羽下暮、実際、『羽下暮善蔵シリーズ』の新作発行部数は下降の一途を辿っている。最後くらい、派手に行きたいとは思わないか？」

「売り上げが落ちていることは……事実かもしれないが……」

「君が責任を負うことじゃない。君は『与えられた役割を忠実に果たしてきただけ』なんだからな」

「そうだな……私だけじゃなく君にも、出来ることなんてなにもない」

「いや……ある」

「なに？」

「『書き直させる』『んだよ』」

「書き直させるって、まさか……」

「その、まさか、さ」

「出来るわけがない」

「どうして？」

「決まってるだろう。書き直させるということは、その相手は——」

「……相手は『作者』だからか？」

「……君も分かっているじゃないか。そうだ。彼と私たちでは『住む世界』が違う。私たちがどうこう出来る次元の話じゃない」

「いや、出来る」

「なに？」

「実は……会う約束を取り付けたんだ。君も含めた、三人だけで。これが最終作だから、最後くらいは顔を合わせて慰労会をしないか、と申し出たら、意外なほどあっさりと承諾してくれたよ」

「本当か？」

「ああ。最後くらい『自分が生み出した虚像』と会っておきたいとも思ったのかもな。三十年間も頑張ってくれた僕たちに直接労いの言葉をかけたい、とも言っていたよ。当然、僕らが一緒にいることが人目についてはまずいので、偽名を使って山奥のペンションを借りることにした。その席で、直談判するんだ。羽下暮善蔵最後の事件を書き直してくれ、って」

「……承諾するとは思えない」

「もし、そうなら……こっちにも考えがある」

「考え？」

「羽下暮、僕は、こんな——あえて言う——地味な作品が『羽下暮善蔵最後の事件』として世に出るくらいなら、その存在を抹消したほうがましだと考えている。羽下暮善蔵は、ひとつ前の事件——『永劫迷宮』——を最後に、いずこへともなく姿を消した。という幕引きのほうがいいと、僕は思っている……」

「野田……」

先日〇〇県山中のペンションにて男性三名の死体が発見された事件についての続報が入ってきた。すでに身元が判明している羽下暮善蔵さん、野田公一さんとともに死体で発見されたのは、指定暴力団△△組幹部、住吉恭二さんだと判明した。現場と死体の状況から、野田さんと住吉さんとの間で何かしらのトラブルが発生し、ナイフを介した揉み合いの末、それを止めようとした羽下暮さんを巻き込む形で三人ともが致命傷を負い死に至ったと見られている。

文芸誌編集者の野田さんと羽下暮さんは、三十年来にわたる親友同士で、編集者と作家という関係になってからも、互いを名字で呼び捨てしあう間柄だったという。

羽下暮さんは、作家と同名の探偵が活躍するミステリ小説「羽下暮善蔵シリーズ」で人気を博していた。

お読みいただきありがとうございます。

「新生ミステリ研究会」というサークルで出店しております。

「B-41、42」ブースにてお待ちしております！

